

人間と記号 (I)

北川 剛 一

Man and Sign [I]

Goichi KITAGAWA

人間の情緒、その伝達は記号に載せて伝え記号に載せて送り込まれるものである。一人の造形する者として人間と記号の関係について考えてみたい。

我々作家は執拗なまでに欲望という名の夢を見続ける最も利己主義たる人格の持ち主であるかも知れない。それはより独創の道に（人格もしくは個性）に近づけば近づく程にその夢を見る機会に遭遇するものである。その夢は目を見開いたまま展開されるものがたりである。人は皆自己という主義を持ち、その細く長く続く路を歩み通そうとするものであるが、如何なる主義も曼陀羅の渦中に比すれば、偏見（そう思うでなく、そうとしか思えないこと）であり決して全てにおいて全てに満たされたものではあり得ない。ただただ無明の世界にあって真理という永久に出会うことはないであろう永遠の灯に向かって歩み続けるものである。過去の知識と経験はその記憶によって足許のみをは照らすであろうが、見たいもの、見ようとしているものをは決して照らし出してはくれない。人は明るく照らし出された過去と暗黒の未来との亀裂のあいだに在ることになる。しかもそのどちらにも安らぐことなく生命の源泉は息吹いている訳である。その時間と空間とエネルギーのミックスされた超感覚的スケールの、奇妙でかつ神秘的でさえある世界に厳然として確かに、常に同時に存在しているのである。亀裂の淵にいる人間はまるで微妙に震え、絶望的孤独に追いやられているようにも、瞬時にしてやって来るであろう未来に対し、靈妙な程の可能性を全身全霊にみなぎらせているようにも見える。理気の飽和された状態にあり、そこに創造の源流がある。還相と願生の渦巻く気流は、その人の個という中心から湧きあがり吸収される姿をして、芸術をこころみる者の心であり、人格の核心である。あまりにも感じやすく静寂で沈黙の守られたこの世界は、客体との小さな小さな勇気あるかわりあいを持っている。そのかわりあいの衝撃は素材を息吹かせ、姿と生命を与えうるものである。素材は作者の人格を持って復活した生命体となり人格は素材を持って生と死をつなぎ生と死のかかわりあいの内に生かされることになるのである。人間は彼の存在するに必要な全てのものに関係をもっている。彼は彼を位置づけるための場所を、存続するための時間を、生きるための活動を必要とする。彼は光を見、物体を感じ、音を聞く。全ての存在は彼との交渉関係の許にあり、交渉はそれを含有する手段に他ならぬ、がしかし我々未来へと生命を継ぐ人間にとって与えられた可能への糸口とも言える。その生命ある動性の内にあって我々は常に生の空虚なまでに不安定な状態にあり、絶えず未来に生きようと熱望する。信じ易く、疑い深く、憶病で大胆な我々は一つの欲望を持って在らぬ状態の快楽を結びつける。その快楽を通過する頃幸福に満たされることはない。そのときその状態に相応した他の欲望を持つ不安定な性格を持つがゆえんである。全くの休息のうちに情熱なく仕事なく慰戯なく努力なく置かれ

る程人間にとって堪え難きものはない。このとき彼の虚無、彼の遺棄、彼の不足、彼の依属、彼の無力、彼の空隙を感じる。彼の存在はその存在性を放棄するを感じ、倦怠は彼の魂の奥底から流れる。我々が倦怠を忌みかえって激動を好むということは全き安静が我々の人間性に反すること、従って動的不安定な生命活動が我々の規定に属することを意味する。人間は思考するために存在する。その思索は自覚的意識によって自己自身を求め、その創造の源を探り、その永遠の目的へと向かう。しかしその途上であって答は間に充ちた答ばかりである。答は自ら消え失せてゆくことによって存在に対する新しい道を開きつつ、自らはどこまでも間にとどまる。間は間に碎かれ、疑わしさは無限に自己を展開する。そこで間は本来の活動を発揮することができる。この動性によって間は生き、この間によって我々は生かされる。現実の存在への通路を塞ぐことなき間こそ認識に充ちた間である。間に充ちた答、認識に充ちた間は無限に成長し、絶え間なき不安に迫りやうであろう。しかし我々は長く久しく不安定と不確定のうちに生かされることを避けるべきではない。なぜなら、それが生の証であり全き安静は死であるから。安易と安楽は許し難く不健全を呼ぶものであり、不安は生の証であり常態である。生に對極し、厳然たる絶対性を暗示する死の不安は生を自覚し自己の存在に忠実である者にとって深く意味あることである。死の謎を含む不安は単に心理的、神秘的恍惚ではなく我々をして我々の真の存在に接近させることにある。死は我々をひとつの絶対的極限に押し詰め自己を逃避しようとするものをして退引ならず対面させる。この接近において我々の不安はさらに圧力を増すに違いない。なぜなら人間の存在はその本来において問われるべき存在であるから、その存在に向かつての絶えざる接近は問われる性向を一層増す以外の結果を持ち得ないからである。死の接近による生の自覚は人間の根本規定である。死に近く生き自らを問い、自らに生きる。死が彼方に対立するものでなく、かえってそれが各々の瞬間において我々を脅かす。死は逃れて逃れ得るものでもなく、生は自己を顧るごとに死を見い出す。生は死であり死は生である。要するに人間はその存在において最も問われるものである。文字を、音と空間を媒体として我々は我々自身存在と死を問うものである。多くの確実なことは矛盾する。多くの虚偽な事柄は矛盾なくして対立する。矛盾は虚偽のしるしでもなければ矛盾しないことは真理へのしるしでもないのである。生が人間によって創られたものでないと同じく、死はまた人間によって創られたものではない。そして生と死が同時に存在するということは争い得ぬ事実である。死の関心は我々をして生に近づけしめ、死は我々を飲み干す程の絶対性を持っている。この立場に立って生を注意深く反省する死の見方こそ生を理解する所以でなければならぬ。死の見方は何よりも我々を懐疑と不安に陥れる。凡庸な魂が安易と満足とにあるところに、最も思慮ある者が困惑と戦きを感じるのは何に因るのであろう。優越なる魂は自己の存在を正直に視、素直に問うことを知っているからである。彼の求めるものは人間の究極的な総合を与える最終の答である。彼はこの究極的なものの限界を気ままに動かし、その距離を随意に縮めることをしない。それは最後の答であるべきであるがため。彼は諸々の一時的解答や決着に甘んずることが出来ない。産まれた答は直ちに次の間を生み出すものである。如何なる間に合わせの答も彼には人間の存在の問われるべき解き去るための助けとはならないから、この存在の問われるべきことを絶えず新しく発見し追求することがむしろ彼の課題となるのである。究極的な答を求めることにおいて発生した彼の間は、全体の間われるべきものとなることの完全の表現をして媒体の内に見出せるのである。彼の歩み一步一步が問いに満ち、彼は自ら問うものであり問われるものである。美しく調和している答は主義と同じように、それは真ではあるが全てでは

あり得ない恒久的事実である。彼は絶え間なく求めることを諦めぬが故、より人間であり、不安に見舞われるのである。死の見方と認知は作家にとって生の極限に自己と媒体を生かしきることであり、完成においては生命活動の停止を意味し、次の巨大な問いに向かつての不安であり戦きである。その時間的空白は心の裡において永遠不死の存続という不可能な欲望に向かつて立ち上がる靈氣にまで成長を続ける。そして利己的作家はこよなく自己を、またその生かされる場を愛する。大いなる魂とは最もしばしば愛するところのものではない。激しい愛を持って魂の全幅を充満する情念である。そして全身全霊を持って歩み出す程に魂を満たす、それには情念の氾濫が必要である。しかしいかなる情念も理性的要素を欠いては永遠不死の美を持って存続し得ぬものである。なぜなら人間の理性は地上における最も美しき場所であり、思索に先立つ条件でもあるから。

真理の灯の許において繊細の心の論理は非常に沈黙的である。例えば、今書かれている主体は文字であり、言葉でも声でもない。文字の沈黙する部分に言葉の意味を読み、声の位置を知り、沈黙する部分に耳を傾け、その真の存在を感受するものである。文字の持つ沈黙界の存在性はとりもなおさず真理への状態性を指し示すべく、諸事象の内に宿されている絶対精神なるものの痕跡は、沈黙の世界との相関関係を保つことによって存在しうる。沈黙の背後にあって我々が沈黙を生と死の絆として結合させることができるのはその真理への愛の証そのものであるがゆえである。対話の上に横たわる沈黙は生と死、それを継ぐ愛と同格にして始源的要因である。対話の内部には外部に現われているより多くの沈黙が内在する。例えば愛の中には言葉よりも多くの沈黙が宿し、この言葉に死への熱望的接近を意味する沈黙の背景がなければ、言葉は単に置き去りにされるのみである。人格を得た媒体（言葉）は執拗なまでの沈黙の充満から生じるものである。もしこの充満が媒体内へ流入することがなかったら、媒体自身の物質的飽和によって破裂し、無意味無価値な状態に落ち込むことは明白である。媒体が物語り始める頃媒体は沈黙に属するのではなく、人間そのものの側に属していることを実感する。媒体と対者との対話が沈黙の背景により人間の内在に帰する。しかし媒体はそれ自体沈黙の淵から直接語りかけているように思われる。なぜなら媒体自身の、死に直面する程の究極の言葉であり極限值であるがゆえ、あの過去と未来の亀裂の奥深き深淵より出でる叫びであり姿であるゆえ。このように作品となった媒体は人間精神のより深く確かな声として、より具体的に死滅的生命力を持って語りかけるものである。素晴らしき作品の前に身を委ねるとき、我等が精神をして激情の充満はかくも激しくどくどくと絶え間なく押しよせ、はらわたをうずかせるではないか。熱情が垂直線上を天空と大地に踊り跳ね乱舞するを見、その緻密な理性の法則は水平線上に幾重にも幾重にも舞い落ちる平和と静寂そのものであり、遠く沈黙が横たわっているを見るではないか。

さてこの沈黙の内にあってあまりにも形而上なる生命力の在り方、周囲との関係は如何にあらうか。

我々は具体的状況の世界において知覚と知覚されるもの、表象と表象されるもの、思惟と思惟されるものを包括することによって事物との関わりを持っている。人間は自我と事物との共存する具体的状況から意識を抽出する。その意識の主体を自我というがこの自我はもともと抽象の産物たる意識の主体であるにもかかわらず、それを自我と呼ぶことによってそれを生きた全

人として人間人格と同一視し、すりかえてしまう。自我と物体の関係は分離された抽象の産物に他ならない。この自我は一方的に考える我であり、この意識の主体において精神と身体が分離されているのだから、精神と身体を具えた本当に生ける人ではないのである。そのように考えられた物体は精神的共存の場から引き離され、純粋な受動性を持って使用され、経験される物体へと転換されてしまう。自我と物体の関係は主観と客観の関係にあり、自我は全てのものを認識主観として知覚し認識することによって、経験の対象を精神の通わぬ物体として表象する立場である。我々が事物を知覚するというのは、事物が我々人間の感覚器管を刺激して意識の中に多種多様な感覚反応を生むということである。諸感覚の担い手たる意識の主体はこうした感覚的多様を一つに総合して意識のうちに事物のイメージを構成し、それを客観界へと投射し対象化するものである。関係の担い手たる我が沈黙の内に意識の前面に立ち、分離して存在するようになればこの我はまた身体が身体たることによってその環境からかけ離されているような自然的事実の中へも奇妙に稀薄化されながら入り込んで行き、我を内包している事実特有な性質をその内に呼び醒ます。こうして意識的私の行為は、自我と物体の最初の形態という自我本意な経験が成立する。つまり意識の前面に歩み出た自我がさまざまな感覚の担い手たること、環境が自己の感覚の対象たることを宣言するのである。これはまだ始原的かたちにおいて起こるものである。人がものを見るときもはや人間としての自己が人格化されたものとの関係を語るものではなく、人間の意識による物体という物的対象の知覚を規定するものとして受け取られた場合、これはすでに主体と客体とのあいだにさき知れぬ壁を持って分離の宣言が下されたことである。自我は意識の内容たる多様な感覚機能から事物の像を構成し、それを客観世界へと投射する。客観世界はいわば時空的連鎖の状態にある、自我によって対象化された物体は空間の中に配置され互いに外在の関係にある。外在の関係にある物体は同時にまた時間的因果律によって規定される。客観世界において対象化された物体は、互いに時空的関係の内に置かれることになる。しかしこの物体視する世界における時間とは空間化された時間であり、真に現在的体験の内に会うあの時間ではない。このように空間化された時間とは、あくまでも我々の外に客観されるものであり、我々の具体的な体験とは確実にしかも規則的に秒を刻んでゆくものである。時間の最小単位としての瞬間は、いわば点のようなものとして来ては直ちに去るのであるから、こうした時間においてそれは絶えず瞬間的に点を満たしながら過去へ非存在へと流化してゆく。空間化された点としての瞬間が前後関係において、線上に配列されたものにしかすぎない。こうした時間において、未来と過去とを区切る抽象的な点としての瞬間は、決して現在的な持続する内容的広がり、あの広大無辺の力動的精神の広がりを持ち合わせていないことは自明のことである。この自我は決して真の現在の自己に出会うことができない。これは自我と物体、一方的受動と能動の関係にある。私は何かを知覚する。私は何かを感覚する。私は何かを想像する。私は何かを欲求する。私は何かを何かの感情の対象とする。私は何かを思考する。…これら全てに類することはすべからず自我と物体の関係によって基盤を築いているということである。

さて、真に生ける現在の関係、つまり私と貴方という対話的关系とはいかなる要素構造を持っているのであろうか。それは相互性、直接性、現在性、全人性、開示性等概念によって性格づけられ得よう。出会いの関係は、主観的なものよりも彼方にあり、客観的なものより此方にある。自己と他者の現存在の間に成立する。人間は自己内閉鎖的な主観から外に出て他者へと向かわねばならず、他者もまたそれ自身から出て自らを露わに示してこなければならない。こ

うした自己と他者との相互的自発性に基づいて、私達はわたしとあなたの関係へと入ってゆく。私達があなたと出会うのは、あなたが私達に向かいよって来るからである。だがあなたと直接的関係の内へ歩み入るのは私達の行為である。関係とは選ばれることであると同時に選ぶことであり、受動であると同時に能動である。対話的關係とは、まるで他者の呼びかけに自己が答えるという、呼びかけと応答との関係のようである。人間がその世界へと創られているのは、生の根源的状況、つまり生ける生命的関連において常に同時に堪えることによって基づかれる信頼の關係に応答しているかのごとくみえる。この堪えることから、人間の現存在の存立が由来し、そこから人間存在の根底を流れる真実の持続性が生まれてくる。直接性というのは、相互的自発において出会う場において相互に他者を何の掛値もなしにその原相互の純朴なリアリティーにおいて直接的に対応し合う人間相互の關係である。現在性を持つには、瞬時にして如実に現存しているが、しかし感覚的に経験しえない現実を心の前面で支えていく能力が必要である。この能力は感情移入でもなければ直覚でもなく、敢然と他者の中へ突き進んでゆくことであり、他者を他者の側から経験することである。この抱擁的關係は二人格の關係にあり、両者によって共通に体験され、いずれにせよ両者のどちらかが能動的に参与していることであり、一人格がこの共通の出来事を自己自身が行為しているという実感を何ひとつそこねることなく、同時に他者の側から体験することである。抱擁は自己自身の具体性の拡大であり、生の具体的状況の充足であり、人間が参与している現実のまったき現前を意味するものである。自分が現に行為しているというリアリティーを何ひとつそこねることなく、他者が何を感じ知覚しているかを他者の側から経験し、如実に思い描くことによって他者を確認することができるが、この相互的確認を通して対話はなされるものである。人間という孤独なカテゴリーは距離と關係の共働きとして理解され得る。他の全ての生物と異なると、人間は世界と距離をにおいて向かい合って立っているものであり常に他者の關係に入ることができるのである。この距離と關係という人間の姿勢が広範囲にあらわれているのは、言葉を別にして他にない。人間は彼のみが語ることが出来る。というのは彼のみが他者にまさしく自分と向かい合って隔たって立っている他者として呼びかけることができるということでもあり、他者に呼びかけることによって、彼は關係へ、より人間的真髓へと入っていき、呼びかけ、語ることが真に直接的に創造に加わることに直結している。一回限りの歴史的出来事でなく、戻することも重複することもなく、各瞬間に純粹に生起する出来事である。制作者にあたって頭上を旋回するインスピレーションの飽和的エネルギーの力動は時間の存在を忘れさせ、爪と指間より噴出せるインスピレーションの為す核反的エネルギーの昇華をして、自己の存在せる空間をすら離脱させる程のショック地帯に誘致する。だがこれは時間空間を呼吸することを忘れたのではなく、まさにその真只中に生ける精神的生命体そのものの生ける姿に他ならない。なぜならそのとき作者と媒体は一つの時間と空間とエネルギーのミックスされた世界に生き、我々、正に活動せる者はそこに創造そのものの胎動を聞くからである。まるで宇宙の原初にそうであったように、その神秘的な程の精神体が極限にまで成長しきったとき、どのような生誕の仕草を、叫びを、声を、ことばを発するのであろう。その種族に共通のことばをその密度と高揚な拡がりによって語り伝え放つのであろう。今私の手にしている媒体は文字という媒体であり、私の専門とすることばでないことは自明であるのだが（なぜなら私は造形によって語ることばの可能性を文学の持つ文字に変えて持つ）その文字言語を手本としながら立ち入って筆を続けることにする。

芸術は自然的対象の印象でもなく、人間の心的状態の表現でもない。芸術は人間の実体とものとの関係の所業と証であり、形と成ったところの間である。人間存在の原理を人間と人間との間という領域において実現するとすれば、その実現は一つの事態、現前化において頂点に達する。この事態は、それが本質的に成熟した形では、おそらく稀にしか現われない。この瞬間存続しているがしかし感覚的に経験し得ないという現実を心の現前に持ち出したり、そこで保持するという能力、現実想像としての特徴を持つ。例えば私が他の人間がまさしく意欲し、感じ、受け取り、考えていることを表象すること、しかもそれを切断された内容としてではなく、まさしく他者の現実の中で、人間のこの生の経過として表象することである。この現前化を更に全うするとすれば、それは決定的な仕方ですべてのことも超えてゆく。そこでは、表象するサインに表象されたものの自身の性格が身一つとなって入っている。即ち他者の意志行為を表象する私のサインには意志行為の本質であるものが一つ所となって働いているというが如きである。この通例として共感ということが引き込まれる。それは私が例えば他者の特殊な痛みを経験する時、他者のその特殊なものを、従って一般的な不快、あるいは一般的な悲しみをでなく、この特殊な痛みを、しかも他者のそれを感じ得るようになるという仕方を経験することである。私と他者が共通な生の領域によって取り囲まれており、そして私が他者に加えるところの痛みが、私自身の中で座撃し、遂には人間と人間との間の生の矛盾が深淵としてあらわになるところでは、この現前化は、その極、魂の逆説にまで高められる。その時、これは他の手法では決して促進され得ないものが起こり得るのである。人間は自己の存在において他の人間により証しされることを欲し、他者の存在の中に自己が現存することを欲する孤独からの希求者である。人間の人格は証しされることを必要とする。人間は人間としてそれを必要とするからである。自然という類の国から孤独な範疇（人間）という冒険の中へ遣わされ、兄弟であるカオスによって取り巻かれた人間は秘かに、そしておずおずと存在許への肯きを待ちうけている。がその肯きは人間にとってただ人格から人格へと生成し得るのみである。人間は自己存在という天からの絆を相互に渡し合うことによって生かさるべき世界に存立するのである。その証しとしての問いと応答は、人間の諸感覚の生命の故郷である範疇の中で始まり、感覚生命のこの未究明な関係に絶えず心しなければならない。そして、真に芸術は自然の中に隠されている。芸術をそこから引き裂くことができるもののみが芸術を持つ。しかし我々は芸術が底深く隠されていなければいける程、芸術が引き渡されるのに反抗が強ければ強い程、それだけ十分私は働かねばならない。芸術の働きの各々は、基本的な放棄によって、即ち世界をひとつの範疇にまで専一無二に創造的に制限することによって可能にされている。彼が芸術家として生きている限り、芸術家はこの唯一無二の範疇の中に生きるものであり、この中で彼は、かかる喪失と獲得の大きさにおいて、その作像力によって形象化しつつ真の生成へと采配を振るのである。がただ一つの芸術に関してはその範疇は諸感覚のうちの一つによって完全に規定され得ず、むしろ諸感覚の層の上に聳え立っている。即ち文章芸術である。文章芸術はある一つの感覚が世界に向かい合っていることから由来するのではなく、人間として人間の根源的構造から感覚の経験によって基礎を置かれ、精神の象徴力によってその上にアーチを掛けられた人間の根源的構造から、即ち言葉から由来するものである。たとえ諸範疇が決定されていることより客観的に捉えようと務め視覚と聴覚の代わりに空間と時間とについて語るとしても、文章芸術には言葉が第三のものとして残留する。他の諸芸術は空間と時間との両範疇から創造し、この範疇に対して義務と責任を負い、この範疇の自由と権利を遵守する。絵

画は光の空間において形の連絡を物体性の放棄の下に守り、彫刻はこの同じ光の空間において物体的な個別存在を連結の放棄の下に設立し、建築はこの空間において均斉、機能的釣り合い、幾何学的構造を非数学的現実の放棄の下で、しかもこの非数学的現実の中へと化身させ、音楽は時間自身を音の身体のように手脚をつけ、しかもあたかも空間がないかのように分節する。が文章芸術はそれが声高く称讃しようと、あるいは物語ろうとも、あるいは人間の間の出来事を対話において展開しようとも、言葉以外のいかなるものにも服従の義務がないのである。芸術の中に顕現しているものは、勿論事物の神秘でもなければ精神の神秘でもなく両者の間の関係に他ならない。芸術とは人間の実体と物の実体との間の関係の所業と証しであり、形となったところの間である。また芸術が隠されている自然から芸術を引き裂くことが人間の特別な在り方に与えられている。作家がそれを為すのは、彼が感覚世界の背後にまで侵入するために試みることによってではなく、感覚世界の形象性を完全な形象物にまで完成させることによってである。完成において私達は始源を見出すのである。そこにおいて我々は存在の中心に息吹く自らを、また全てを悟ることが許される。始源に至る道程は開示、それ自身現前を顕示しない開示に満ちた間の関係によって充満されていた。関係を顕示する全ての所業と証しはすべからず記号となる。すなわち代理表現されるものであり、表現するものである。それは自己に絶対的に近いものにはとどまらず、意味されるものの自己同一性は絶えず隠れ移動する。表現するものに固有なことは、それが自己であり、他者であり、反射の構造として生まれ、自己から離隔されることにある。表現するものは解釈するものを生むことなしには機能せず、この解釈するものはそれ自身記号となり、かくして無限に至る。記号（サイン）とは、自身以外のあるもの、その解釈するものをある対象にかかわらせるものであり、その対象に対して記号自身が自身の対象としてかかわっている。解釈するものはついには記号となりかくして無限に至る。もしこの継起的な解釈するものの関係が終わるならば、そのために記号は少なくとも不完全なものとなる。それゆえ意味が存在しはじめるや否や諸々の記号しか存在しないことになる。我々はただ記号の内でのみ思惟し、思想の内に生き、また全ての思想は記号の内に存在する。しかしこの人間関係においてあまりにも至上なる言語の発生と起源はどこからやって来たのであろうか、それは他の芸術発生源と同じく人間精神の欲求、つまり情念からである。あらゆる情念は生きようと求める必要のため、互いに避け合わざるをえない人間達を近づけるのである。あの凝視と傾聴の高揚がただただ沈黙の内に、仕草に伝えられ、充満せる沈黙の内から情念に潤む声が漏れる。愛であり、憎しみであり、憐みであり、怒りである。より強い感動を呼び、不正な侵入者を撃退するために、自然はアクセントや叫びや嘆きの声を思いつかせる。この声も時の力によって変化を起こす。欲求が増大し、仕事が複雑になり、文明の光が拡がるにつれて、言語は正確となるが、あの関係の世界、情念がこもらなくなる。言葉は感情の代わりに観念を置き、もはや心情には語りかけず、理性に向かって語りかける。それはアクセントのうねりを消され、音節のはっきりした発音が耳を叩く。言語はより正確により明解になるが、しかし単調で響きは鈍く冷たくなる。それは言葉が情念からの血縁をより薄くより物体化される傾向にあることを示唆するばかりである。この声となった言語の他に形となった言語、つまり文字がある。文字表記の完成に遠ければ遠い程、粗野であればある程その言語は古くあの情念そのものの仕草に近づくものである。文字表記が話術に起源を持つとは考えられない。それは別の性質の欲求からのものであり、民族の存続とは全く無関係な環境によって、あるいは早く、あるいは遅く生まれ、古代諸民族において全く起こりえなかった如くである。ある仕

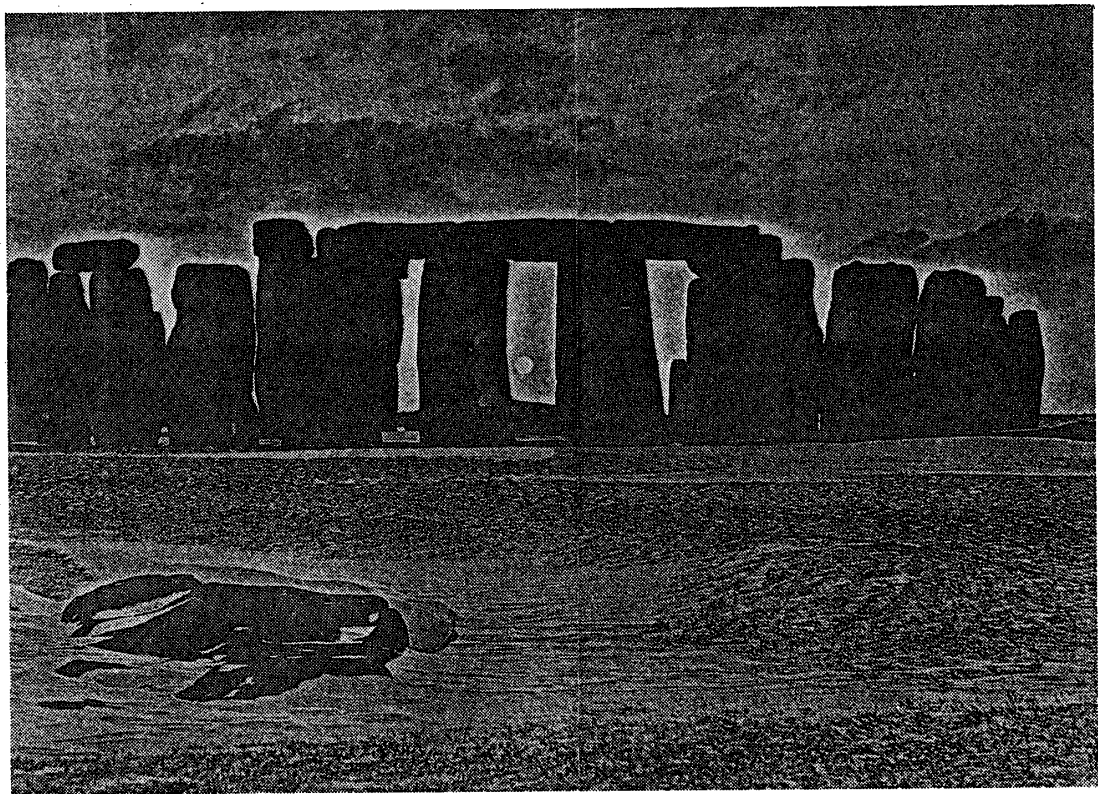
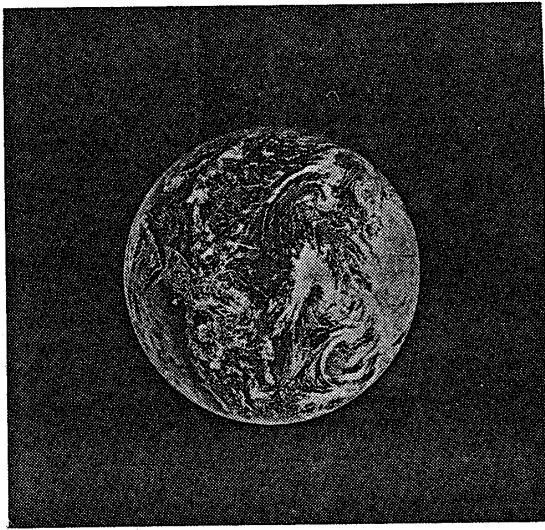
草が視覚に歌い、ある仕草は聴覚に告白したのである。ある記述は事物そのものを描写した。メキシコ人は直接的に、エジプト人が寓意的表象によって表示した。次に民族的法律の統一によって音を描写し、同時に眼に語りかける中国の文字表記があり、次の方法に言葉を音声上音節を区切り基本的部分に分解しそれをもって想像しうる言語音節を形成するという西ヨーロッパ的方法がある。このように言語は、民族風土によって想像を絶するほど個性豊かにし、しかも巧みに誕生し完成に近く漸進したにもかかわらず言語学自身未だ大成されていないことは何を物語るのであろう。真実は分解分析することによってあの関係の世界をそれ自身壁によって仕切り隔離されることを拒んでいる、まるで生と死を分け隔てるがごとく。

続けて真理の声に轟き渡る、「生々流転の輪廻が巡り回ろうとも全体は全体によって全体である。始源にあって世界は世界する」と。始源にあって始源の声が聞こえ、始源の姿が見え、始源の魂が甦える。完成において我々は始源を見出し、始源において世界は世界し、作品は語たり、泣き始める。沈黙の声が声し、静寂が死に近く生を語る。真なる摂理の許にあって全ては全てによって全てであり、全ては全てにおいて全ての自由生命に生き、生かされ得る。ただ人々は始源の声に耳せず語り、始源の姿に目せず形象し、始源の生命に生きずして、その声聞こえず、語れず、その姿見えず、形象せず、その生命生かさず生かされず、空虚なぬけがらが集積されるばかりである。始源にあらずして語ること及ばず語るなかれ。始源にあっていかなるエゴイストも許されよう、むしろそれが望まれ得る。それは個にあって本源的中心から湧きあがる力であり生命である。堪えよ堪えよ、充滿しきった生命に堪えよ。充滿しきった充滿に。

人間と諸芸術との関わり合いにおける考察は以上述べたことに留どめ、視覚造形芸術の視覚伝達記号、その民族、風土を越えた通訳を必要としない造形記号についての考察、研究は次の機会を待つことにする。そのあまりにも人々の近く根源に生き、直接に存在することによって見過ごされているが故。

参 考 文 献

- 小林善彦訳；言語起源論（J. J. ルソー）現代思潮社（1970）
足立和浩訳；クラマトロジーについて 上・下（J. デリタ）現代思潮社（1972）
杉本秀太郎訳；形 of 生命（H. フォーション）岩波書店（1969）
稲葉 稔・佐藤吉昭訳；哲学的人間学（M. ブーバー）みすず書房（1969）
矢野萬里・池上保太・貴志謙二・近藤洋逸訳；シンボルの哲学（S. K. ランガー）岩波書店（1960）



ストーンヘンジ (英)

